**アバター‐神の化身**

2010年7月18日

逗子例会

スワーミー・メーダサーナンダによる講話

於・逗子協会

　私は見ていないのですが、皆さんはおそらく「アバター」という映画をご存じでしょう。高額な制作費をかけ最新技術を駆使した３Ｄ映画で、大ヒットしました。「アバター」という語はコンピュータの世界では２Ｄの画像、３Ｄゲームのモデル、コンピュータ上のユーザの分身を指すユーザネームとしても使われています。また、「アバター」と呼ばれる自己啓発コースもあります。しかし、これらはどれも、インドにおいてアバターが持つ意味やコンセプトを必ずしも反映しているわけではありません。映画に見られたように、別の種族に姿を変えること、すなわち変化・変容などの意味が最低限伝えられているだけです。「カルマ」など、インドを起源とする語句が人々の興味を惹き、誤った意味で用いられることが多いものの多用されるようになったのは興味深いことです。

　アバター（avatar）はサンスクリット語で高いところから低いところへと降りること、降下を意味します。インカーネーション（incarnation）はギリシャ語が語源で、肉体の形を取ることを意味します。ですから、アバターという語には高いところから低いところへ、という概念が、インカーネーションには血と肉の形を取るという概念があるのです。ヒンドゥイズムのアバターという概念では、これら二つの意味が組み合わさっています

　神はこの世界の上に位置する天にお住まいで、この世に降りられると「アバター」と呼ばれる、と考えられています。神が降臨される際に何の姿形も取らなければ、人々は神を認識することができませんから神は使命をお果たしになるのが難しくなるでしょう。神は、私たちが分かりやすいように形を取られるのです。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、神が水牛のために姿をお現しになるのなら水牛となられるだろう、とおっしゃったのはこういう理由からです。

**宗教的伝統におけるアバター**

　この「神の化身」という概念は様々な宗教や伝統に見られます。キリスト教にもあります。西洋の有名な哲学者スピノザは、キリスト教における神の化身という概念について、神はすべての中に現れているが、完全なレベルで現れているのがイエス・キリストの中である、と書きました。この、「人間の中に、より完全な形で現れている」というのが、ヒンドゥイズムにおける化身の概念です。神は私たち誰の中にも存在していらっしゃり、人間の場合は他の動物よりもその程度が大きいのです。そして、人間の中でも現れの程度がより高いのが賢者であり、イエス・キリストのような人格の中に神の最大の現れを見ることができます。

　しかしキリスト教では、イエスは「神の唯一の子」、すなわち神の「唯一の」化身なのです。イースラム教ではイエスも預言者であると認められていますが、ムハンマドが「最後の」預言者であることを強調しています。では、仏教の教えではどうでしょうか。これまでに例会の講話で神の化身について触れた時、この考え方が一部の参加者の方には異質のもの、聞いたことがないものであるのが明らかに見て取れたのを覚えています。インドでよく話題とされるテーマが仏教に慣れ親しんでいる方々に異質に聞こえたとことに、私は少し驚きました。これは、神道や日本の仏教の中では神の化身について語られていないためであるということが明らかになりました。確かに、仏教の教えには神はいません。ブッダは神について説きませんでした。つまり、神がいなければ神の化身もいるはずがないのです。ブッダは純粋意識の現れのみを信じ、この境地に達する方法を説きました。

　しかし、一般の人々にとって至高の実在という概念は理解しがたく、それを信じるというのはさらに難しいものです。人々が困難にあった時、救いを求めるのに人の姿をした神が必要なのです。ブッダは自らこの立場となり、仏教の一般信者には神として礼拝の中心となりました。興味深いことに、ヒンドゥ教徒はブッダを神の化身であると考えています。また、世界の多くの仏教寺院では、ヒンドゥ教寺院で行われているのと同じ儀式が行われています。お辞儀、読経、香を焚く、供物の献上、さらには同一の祝祭などが行われています。また、ブッダも慈悲心から菩薩へと姿を変え、人類を導き悟りの道を示すと信じられています。

ヒンドゥイズムでは伝統的に、神の化身という概念について多くの聖典があり様々な議論が交わされてきました。ウパニシャッドはヴェーダの真髄であり、そのウパニシャッドの真髄がバガヴァッド・ギーターであると考えられていますが、バガヴァッド・ギーターの第４章７～８節で主クリシュナがはっきりと次のように語っています。

　「正法（ダルマ）が実践されなくなり、邪法が世にはびこった時、バーラタ王の子孫（アルジュナ）よ！ 何時でも何処でも私は姿をとって現れるのだ。正信正行の人々を救け、異端邪信の者どもを打ち倒し、正法を再び世に興すため、私はどんな時代にも降臨する」

**神の化身の数**

　ギーターには様々な解説書がありますが、その中で「神の化身」の概念が説明されています。そこで次の疑問が生まれます。「神の化身はいったいいくつあるのだろう」キリスト教では、イエスただ一人です。イエスの降臨の前には誰もおらず、イエスが再び降臨すればそれはすべての終末の予兆です。ヒンドゥ教の解釈では神には１０の化身がいます

　中世の高名な詩人Jayadevaが作曲した『Dasavatara Stotra』と呼ばれる有名なサンスクリットの賛歌があります。この中でクリシュナは、初め魚に姿を変え、次にカメ、イノシシ、人獅子、矮人、斧を持ったラーマ、シュリー・ラーマ、鋤を持ったバララーマ、ブッダとなり、現在の時代であるカリ・ユガの終わりにはカルキとなって現れてこの時代の周期を終わらせると言われています。ここに進化のプロセスを見ることができます。水中に住む魚、次に両生類、ほ乳類のイノシシ、巨大な人獅子、そして小人、次の斧を持ったラーマはまだ幾分暴力的ですが、やがて理想的な人格のシュリー・ラーマとなり、シュリー・バララームが人間の性質を持ち、ブッダで苦しみを終わらせ最高意識を見出す道が説かれます。そして１０番目のアバターがカルキで、この学派ではこれ以降に化身は現れないとされています。しかし『Bhagavata Purana』と呼ばれる別の聖典では、２４の化身が降臨すると明言されています。

　ヒンドゥイズム最高の聖典と言われるバガヴァッド・ギーターには、神は必要があれば何度でもこの世に降臨する、すなわち神の化身の数は無限であると記されています。ある時、クリシュナとアルジュナが散歩に出かけ、アルジュナはクリシュナを至高の実在であると褒め称えました。クリシュナはこれには答えず、代わりに一本の木に近づいて指さすと、アルジュナに何が見えるかと尋ねました。「大きな木が見える」とアルジュナは答えました。「他には？」とクリシュナがさらに聞きました。「黒い実をたわわに付けた木が見える」「違う、もっとよく注意してご覧なさい」クリシュナは言いました。「至高の実在という木に、クリシュナが黒い実となって幾重にもぶら下がっているのが見えるでしょう」この言葉からも分かるように、神の化身は無限にあるのです。

**預言者か化身か**

　次に、このような疑問も生まれます。「預言者と化身の違いは何だろう」例えば、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは預言者と考えられています。では、神の化身と考えられているシュリー・ラーマクリシュナと預言者であるスワーミー・ヴィヴェーカーナンダとはどう違うのでしょうか。主な違いは、預言者の霊的な悟りのレベルは非常に高く解脱を遂げた魂ではあるものの、完全な魂にはまだなりきっていないことです。霊的レベルの高い魂ではあっても、完全の域に達するまではカルマの法則に左右され従うこととなります。一方、神の化身の生死はカルマの法則に左右されるものではありません。

　アバターは自らの慈悲心により、人間の姿を取るべく直接降臨されます。しかし、人として生きる間は、神の化身の思想や御業も因果の法則に概ね支配されます。食べ過ぎれば苦しみますし、寝不足が続けば眠気を感じます。病気や快楽、痛みなどの影響も受けます。アバターは人間として生きているのでマーヤの影響も多少受けますが、マーヤがアバターを支配することはできません。マーヤを支配しているのはアバターです。シュリー・ラーマクリシュナは、毒蛇と毒のたとえ話をされています。毒はヘビの体の中にあるけれど、その毒でヘビがやられることはありません。同じように、神の化身の中にマーヤはありますが、神の化身がマーヤに影響されることはないのです。

**なぜ神は人となって現れるのか**

　先ほどお話ししたように、無信仰や悪がはびこり悪しき者が正しき者より優勢になると、主はその身を人と変えられるのです。束縛に苦しむ人々が自由と解脱を求める時、主は降臨され自由を与えて下さいます。最近テレビなどで「スピリチュアル・ヒーリング」を行う人を見かけますが、これは霊性とは全く関係がありません。このようなことが流行するなど、何が真の宗教であるのか多くの人々が迷う時代になると、主はこの世に降りてこられるのです。人々が霊的な乾きに苦しみ道を示して欲しいと祈る時、この神への渇仰が世界中で起こると、主は私たちのもとへといらっしゃるのです。

**神を愛するには**

　霊的に成長して神を悟りたいのならば神への愛を育みなさい、と言われたら、きっとこう思うでしょう。「神が見えないのに、どうやって愛せばいいの？」夫を愛しているのも、妻や子供を愛しているのも、愛の対象が目に見えるからです。これは当然の、理にかなった質問です。霊的生活でなかなか進歩できないのもこの問題があるからです。神の姿が見えないから神への愛を育むことができないのです。ここに、神の化身が必要である理由があります。

人の姿をした神のアバターであれば、人は目に見て愛することができるのです。神の化身を愛することは神を愛するのと同じです。シュリー・ラーマクリシュナは、神の化身の内側には神のみが存在するのであり、神の化身を愛するのは神を愛するのと同じだとおっしゃいました。ホーリー・マザーも、シュリー・ラーマクリシュナの信者にこうおっしゃいました。「私の息子よ、シュリー・ラーマクリシュナは人の姿をしていらっしゃいますが、その内側は神に他なりません」羽根枕の枕カバーの中には、羽しか詰まっていないのと同じです。

　神の化身の目的とは、人々に道を示し、宗教を復興させ、求道者を導き、神を愛し神の叡知を知る方法を説くことです。神はすでに完全であられても、人の姿を取るとやはり厳しい霊的修行をなさいます。シュリー・ラーマクリシュナでさえ、１２年間も修行をされました。ブッダやイエス・キリストも例外ではありません。完全な存在として生まれてくる神の化身に、なぜ修行が必要なのでしょうか。シュリー・ラーマクリシュナは、自分が行った霊的修行の１６分の１でも行えば、人が霊的悟りを得るには十分であるとおっしゃいました。でも、なぜ１６分の１なのでしょうか。１００分の１ではどうなのでしょうか。実際には、シュリー・ラーマクリシュナのなさった修行の１０００分の１でも実践すれば、解脱は確実でしょう。

**無限なる者が有限に生まれるには**

　シュリー・ラーマクリシュナの時代に科学的知識を持つ者にとっては、悩むべき問題がありました。「無限なる主が有限となって人間の姿で現れることができるのだろうか」という問題です。

この件については、『ラーマクリシュナの福音』の中で「M」とスワーミー・サーラダーナンダジが大いに議論しています。『福音』の中で指摘されていることの一つに、海に触れたいのなら海岸線の端から端まで指を海水に浸す必要があるか、というものがあります。

そんな必要はありませんね。どこか一か所で触れれば十分です。同様に、ガンガー（ガンジス川）に触れたいのであればベルル・マトやリシケシなどで一度触れれば十分であり、川の源泉からベンガル湾まで歩く必要はないでしょう。どこであろうとガンガーはガンガーなのです。どこか一か所で海に触れれば、それで海を見た、海に触れたことになります。同様に、神の化身には神が内在するのだから、神の化身を見れば神を見たと言えるのです。イエスが「私を見たものは父を見たのだ」と言われたのは、この意味からなのです。一粒の滴に無限の青空が映るように、有限の人間に無限の神が映っていらっしゃるのです。

　バガヴァッド・ギーターの中に次のような一節があります。「私は生まれることはない。私は永遠である。それでもなおマーヤの力を借りて、人間の姿を取るのだ」マーヤにできることとできないことは何か、などと言うことはできません。マーヤにはすべてが可能です。サンスクリットでは「Aghatanaghatana patyasi?」と言います。これは、「私たちはマーヤの中にいるのに、マーヤをどうやって理解するのか」という意味です。

**アバターの使命**

　神の化身には皆、特別な使命があり、人間として現れる前にマスタープランが練られ、お供となるのは誰で、いつどこに生まれ、どうやって神が使命を果たす助けとなるかなどが初めに決められるのです。シュリー・ラーマクリシュナは生まれる前にサプタルシ（七聖賢）のところに行き、そのうちの一人にこう尋ねました。「私と一緒に来てくれませんか」この聖賢がスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（ナレンドラ）になったのです。ナレンドラの他、ラカール、サーラダー・デーヴィーなど、偶然に出会ったわけでなく、これらの人々は皆、神の化身がある使命を果たすのに必要なマスタープランの重要な一部だったのです。これは、ラーマ、クリシュナ、ブッダ、イエスなどにも当てはまります。

　ブッダが生まれた時代は、宗教による供物の奉献、宗教儀式という名において多くの動物が不必要に殺されていました。ですから、ブッダの生まれた目的の一つは、動物の殺生を止めることでした。シュリー・チャイタニヤが生まれた時代は、カースト間、宗教間の抑圧が激しかったため、チャイタニヤの使命の一つは、万人が平等であること、万人を愛することを説くことでした。

**アバターの特徴**

　神の化身にはそれぞれ特徴があります。シュリー・クリシュナの場合は、無執着です。クリシュナはブリンダーバンの牛飼いたちを男女の区別なく愛し、また彼らからも深く愛されました。ゴピー（牛飼いの娘）たちは、クリシュナがブリンダーバンを去りマトゥラーへ行くことになった時、クリシュナの乗った馬車のところに集まり、車輪にしがみついてクリシュナを引き留めようとしました。しかしクリシュナは、呼ばれると一切躊躇することなく涙も見せず、ブリンダーバンも友も後にしてただちに去ったのです。神の礼拝の仕方にはいくつかあり、神を師と見て礼拝する他、友人として、子供として、さらには恋人として礼拝する方法があります。これらの宗教的態度のすべては、その理想の形をシュリー・クリシュナの一生に見ることができます。他の化身はどうでしょう。ブッダの特徴は、叡知と慈悲心でした。イエスは、愛、赦し、祈りのメッセージを説きました。シュリー・ラーマクリシュナは、放棄、謙虚、宗教の調和、神の母性について説かれました。この中でも神の母性については、ラーマクリシュナ以前に説かれたことはありません。

　神の母性について、西洋のある信者が興味深い記事を書いています。この信者は、ホーリー・マザー、シュリー・サーラダー・デーヴィーについてアンケートを行い、約３００人の信者から回答を得ました。それで分かったのですが、西洋の信者の中ではホーリー・マザーの方がシュリー・ラーマクリシュナよりも人気があったのです。その記事には、シュリー・ラーマクリシュナの時代は終わりシュリー・サーラダー・デーヴィーの時代が来たと書いてありました。西洋人、特に女性の間では、神を父と見るよりも母と見る概念の方が親しみやすいようです。神の化身が聖母をイシュタ（信仰の対象として自分が選んだ神）として礼拝するのはこれが初めてであり、自らの妻を宇宙の母として礼拝するのは先例のない非常にユニークなものです。

　このように、神の化身はそれぞれに特徴があり、これらの特徴はその時代やその時代の人々に適したものであるように見受けられます。西洋の思想には「運命の皮肉」というものが見られますが、ここには「認識の皮肉」というものがあります。よくある質問に、「なぜ神の化身の多くがインド人なのか」というものがあります。この答えとして、インドには宗教も多いが悪も多いということが挙げられます。冗談でよく言われるのですが、インドには悪がはびこっているので神が何度も現れる必要があるのです。しかし、自らの霊性を養わなければ神の化身がいても気付くことができないということも言えます。

**アバターの与える影響**

　神の化身は弟子らを鍛え、自分が使命を伝えた後に弟子らがその使命の遂行を続けられるようにします。神の化身はそれほど長生きができるわけではなく、自らのメッセージを他の人々が伝えられるようにする必要があるのです。また、たった一人の人間が多くの国々に行ったり様々な民族や性質の霊的ニーズに答えたりすることはなかなかできません。このような仕事により適しているのが、弟子なのです。

　神の化身の教えには、シンプルだが深い、という特徴があります。教えについて瞑想すればするほど、より多くの光を得ることができます。また、教えには力強さがあります。なぜでしょう。同じ言葉を霊的レベルのそれほど高くない賢人や普通の人に言われたら、受ける影響は同じではありません。シュリー・ラーマクリシュナは正式な教育をほとんど受けていませんが、偉大な学者や聖人らが師の言葉を聞きに集まってきたものでした。ある学者はこう言っています。「なぜ私がここに来るのか分かりますか。あなたの話すことのほとんどを私は聖典で学び、もう知っています。でも、私はあなたの口からこれらの言葉を聞きたいのです」

　アバターと霊性があまり高くない聖人とではその言葉の影響力に大きな差があります。もし私が、「日本の兄弟姉妹たちよ！」と叫んだとしてもほとんどインパクトはないでしょう。しかし、スワーミージーが「アメリカの姉妹兄弟たちよ！」と呼びかけた時、その反響は極めて大きいものでした。スワーミージーの発言は、悟りを得た者の声だったからです。スワーミージーは誰もの中に同じアートマンを見、それについて確信していたので、スワーミージーがこの言葉を発した時人々の心は大きく揺れ動かされ、数千人の聴衆が皆立ち上がって二分間拍手喝采したのです。

**万物の永遠なる救い主**

　あることを伝えるために、アバターは物語やたとえ話を使って考えを簡単に表現します。聖書には多くのたとえ話が出てきます。『ラーマクリシュナの福音』にも、様々な物語やたとえ話が見られます。象徴化も用いられます。

「求めなさい。そうすれば、与えられる」「門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」などは象徴的に考えを表現したよい例です。また、アバターは儀式をあまり重要視せず、宗教の核である霊性により高い比重を置いていることも分かります。彼らの愛は、聖人と罪人とを区別しません。むしろ罪人や苦しんでいる人、心の弱い人たちに心を砕いています。

　さらに、神の化身は霊性の大切さを伝えます。まるで果物を手渡すかのように簡単に、アバターは霊性を伝えていきます。アバターは贖罪の力を発揮し、罪人を聖人に変えます。罪人から罪を取り去り、自由で純粋な存在へと変えるのです。クリシュナやブッダ、キリスト、ラーマクリシュナの生涯を見ると、このような例をたくさん見ることができます。

**文化の象徴としてのアバター**

　アバターは特定の時代に特定の国に生まれるわけですが、アバターは時代を超え民族を超え万人のために存在します。イエスはキリスト教徒だけのものではありません。ブッダは仏教徒だけのものでなく、シュリー・ラーマクリシュナはその信者だけのものではないのです。神の化身であるアバターらは、あらゆる時代、あらゆる国、あらゆる人々のために姿を現されます。生まれた時はそれほど大きな影響はありません。アバターの真の影響力は言わば雪だるま式であり、時の流れとともにどんどん大きくなっていきます。一方、普通の聖人の影響力は急速に薄れていきます。

　アバターの影響力は霊的レベルにとどまらず、社会的文化的な波及力を持っています。イエスやブッダ、クリシュナのことを考えてみて下さい。社会・文化にどれほど影響を与えたことでしょう。文学、芸術、音楽、舞踊、建築など、世界中に豊かな文化的遺産が存在しています。もしイエスやブッダがいなければ、その数ははるかに少ないものとなるでしょう。世の中には「神の化身」を自称する霊的指導者や弟子がいますが、彼らが本当に神の化身であることはありません。今お話ししたように、アバターとは比類のない霊的現象であり、数百年に一度しか現れない存在なのですから。